

受付No.

2026年度 アートによる地域振興助成（一般）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿

募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

<団体プロフィール>

団体名	KatsuraoCollective実行委員会				
住所	〒979-1602 福島県双葉郡葛尾村落合管ノ又14-2				
団体区分	任意団体	スタッフ数	5名		
代表者氏名(カナ)	モリケンタロウ	役職	ディレクター	年代	30代後半
代表者氏名	森健太郎				
団体URL1	https://katsurao-collective.com/katsurao-collective				
団体URL2	https://www.instagram.com/katsuraocollective				

<申請者・実務担当者> ※団体所在地と同じ場合は「同上」*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名(カナ)	モリケンタロウ	役職	事業統括・ディレクター	年代	30代後半
申請者氏名	森健太郎				
連絡先	e-mail morikentaro9810078@gmail.com	電話番号	090-1348-5467		
住所 (書類の送付先)	同上				

<プロジェクトリーダーの略歴> ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名(カナ)	オオヤマリナ	役職/肩書	かつらお企画室ワークショップ企画担当/地域コーディネーター	年代	30代後半
氏名	大山里奈				
年(西暦) 月	略歴(活動内容)				
1984年5月	茨城県生まれ				
2009年3月	京都造形芸術大学(現:京都芸術大学)洋画コース(総合造形)卒業				
2011年3月	京都造形芸術大学(現:京都芸術大学)大学院 芸術表現専攻 修了				
2015年4月	茨城県つくば市荃崎高校 教員				
2021年10月	福島県葛尾村に入村				
2022年4月	Katsurao Collective設立。かつらお企画室ワークショップ企画担当/地域コーディネーターとして活動				
2022年5月	個展大山里奈 ひとしずくのしたたり(VIENTO ARTS GALLERY/群馬)				
2023年10月	合同会社あること設立。日本文化遺産「牛久シャトー」にて地域連携イベント《シャトーで休日》を実施				
2023年10月	葛尾村に合同会社いることを設立。				
2024年7月	葛尾村にカフェしずくをオープン。				

<福武財団の助成実績>

助成を受けて活動した年度

<外部協力者の状況>

氏名	年代	組織名	所在地(市町村まで)	協力内容(できるだけ具体的に)
菅野幸子	60代前半	アーツ・プランナー/リサーチャー AIR Lab	宮城県仙台市	これまで執筆などで定期的に來訪いただき事業全般へのアドバイスをいただいています。事業アドバイザーとして協力を依頼予定です
日沼貞子	50代前半	女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科クリエイティブ・プロデュース表現領域教授	東京都杉並区	これまで執筆などで定期的に來訪いただき事業全般へのアドバイスをいただいています。事業アドバイザーとして協力を依頼予定です
杉浦幸子	60代前半	武蔵野美術大学教授	東京都杉並区	事業と教育機関との連携についてアドバイスをいただく予定です。
渡辺葉子	60代前半	慶應義塾大学アートセンター教授	東京都渋谷区	本事業のアーカイブ化の手法についてアドバイスをいただく予定です。

<活動内容・事業計画について>

表現手法	アーティスト・イン・レジデンス
活動テーマ	被災地（の地域振興）
事業名	KatsuroaCollective 2026
2026年度の活動期間	2026/05/01 ～ 2027/02/28
活動に従事するスタッフ数	3名

1. 団体の活動の概要

我々は2021年より福島県葛尾村に居住しアートによる取り組みを続けてきたアーティストによるコレクティブです。東日本大震災とそれに伴う原発事故による全村避難を経験した地域で、復興の過程で一層顕在化した社会的・文化的な分断を、アートやものづくりを通じた様々な活動で乗り越えることを目的に、活動を推進してまいりました。これまで現代アート作家やクリエイターの滞在制作の支援、地域の素材を用いたクラフトワークショップ、ワークスペース運営を通じた移住者支援、住民と協働での窯づくり、幼稚園でのアートワークショップ、震災後途絶えていた「どんと焼き」の復活など、多様な活動を地域との連携の中で実施してまいりました。

2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	4～7年
年（西暦） 月	活動内容
2021年5月	メンバー大山が最初のメンバーとして葛尾村に入村。事業設立のための事前調査を実施
2022年3月	KatsuroaCollective設立
2022年5月	KatsuroaCollective2022 活動アーティスト14名、来場者累計4105名 ※累計
2023年4月	KatsuroaCollective2023 活動アーティスト19名、渋谷ヒカリエにてPRイベント、来場者累計10326名
2024年4月	KatsuroaCollective2024 活動アーティスト21名 渋谷ヒカリエにてPRイベント、来場者累計5304名
2025年4月	KatsuroaCollective2025 活動アーティスト19名、せんだいメディアテーク、渋谷ヒカリエにてPRイベント

3. 活動エリアについて

活動エリア	福島県 双葉郡葛尾村
活動エリアの特色（歴史、文化、地域性、魅力など）	葛尾村は福島県双葉郡に位置し、人口1,223人の村です。2011年に発生した東日本大震災で発生した福島第一原子力発電所の事故により全村避難を余儀なくされました。2025年10月時点で帰還（地域内に居住）している住民は448人。そのうち168人は震災後に転入した人々です。かつては「たたら製鉄」「馬産」「炭焼き」「葉たばこ製造」といった産業文化がありました。地域には古くから受け継がれてきた三匹獅子舞や宝財踊りなどの伝統芸能があります。そのほかにも、震災後に再開した畜産事業者の存在や、震災後にニット工場の操業が始まりました。震災をきっかけに移住してきた人々のコミュニティも形成され、地域に新しい風を吹き込んでいます。
活動エリアの課題（まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的にご記入ください。）	地域復興が経済に偏重することで、住民の生活や文化の保全や継承、文化的なつながりの構築が二の次になってしまっている状況があります。震災後に多くの事業者や大学が地域で事業を実施しました。それらは復興の象徴として報道される一方、乱暴な地域調査や住民を人足として動員するような取り組みも多く、住民の生活を阻害してきた結果、現在では教育委員会が外部事業の受け入れを拒否する状況になっています。第二に、震災後の復興と帰村が進む中で、元の住民と移住者、村外事業者と住民など、住民間での分断や対立が生じています。それに対し地域で明確な対策が講じられているとは言えず、住民・移住者双方が大きな不安を抱えています。
貴団体の地域に対するミッション（活動の目的）	当団体は、日々の暮らしの中に息づく創造の営みを育み、被災以前の状態を取り戻す「復興」ではなく、地域に今なお生き続ける人々の知恵や技、風土を起点とした「新たな文化の再構築」を行うことを目指しております。アートを地域社会における重要な“インフラ”として位置づけ、アーティストを来訪者ではなく、地域社会の一員として受け入れ、人々の声に耳を傾け、対話と協働を重ねる中で、地域固有の創造力を引き出し、地域社会に還元する存在として関わります。葛尾村という小さな共同体から生まれる実践を通して、アートが社会や暮らしの中で果たす役割を再定義し、その成果を社会に還元していくことを目指します。

4. アートプロジェクトならではの新しい表現への挑戦や、新しい発想にもとづく社会課題解決への試みなど、アピールポイントをお書きください。

当活動では現代アートを「時代性を持った、社会と相互的な実践活動」と定義し、「Self-Sustaining Village（自活する村）」というコンセプトのもとで活動を行ってまいります。自然、風景、記憶、手仕事といった地域資源を素材として再解釈し、アーティストが暮らしの中に創造的価値を見出すことで、外部支援に依存する「復興支援型」ではなく、地域の内側から文化的エネルギーを生み出す「共創型アートプロジェクト」として、アートを媒介として地域課題のさまざまな課題（村内の分断、人口減少、資源循環の停滞）に対して創造的な解決を図ります。村の手仕事や風土を活かしたクラフトや食文化をアートの視点で再解釈し、地域内外の人が関われる新たな仕組みとともに実装しながら、「作品をつくる」ことを超え、アートが地域経済・教育・福祉・環境の中に実装されていくプロセスそのものを表現活動として解釈し、その価値を社会に提示してまいります。

<今年度の活動について>

5. 2026年度の活動の具体的な方法（前記のミッションを実現するための表現方法や参加アーティストなど）

「分断の修復」をテーマに鮫島弓起雄、杉山仁彦、大川友希の3名の芸術家を招聘し、伝統文化や、地域に眠る天然素材の活用などをテーマにした制作プログラムと発表を実施いたします。

鮫島はデジタルを活用した宝財踊りの現代的解釈を掲げ、失われてしまった踊りや伝統衣装を再現しながら、アートを通じた伝統文化のアーカイブ化を検討してまいります。

大川はこれまでリサーチを続けている三匹獅子舞の文化について、自らが制作した三匹獅子の面とともに、その精神性を表現するパフォーマンス作品の制作に取り組みます。

杉山は地域の土を素材に窯を作り、「葛尾焼き」と名付けられた新たな焼き物文化を村に生み出しています。陶芸作品制作と共に、地域協働によるサステナブルな仕組みの構築と、人の繋がり場を生み出します。

活動にあたり、地域の中心的存在である葛尾村役場、葛尾村教育委員会、葛尾むらづくり公社や、半澤富二雄氏（震災時に役場職員、震災中から地域活動の中心となって活動）、ニット工場を営む（有）カラーofカラーズなどと協働しながら活動を進めてまいります。成果は村内外での発表のほかSNS発信、記録集作成などを通じて発信を行います。

6. 2026年度の実行計画（目標を実現するために、いつ・どこで・何を実現するのか）

年 月	活動内容
2025年1月	参加にかかる最終調整を実施（作家および関連事業者へ）
2026年5月	事業開始。Webサイト、SNSオープン。以降随時更新
2026年5月	第1弾プレスリリース発出
2026年5月	作品制作期間。作家の制作ペースに合わせて月数回の滞在と調査活動を支援。（～9月ごろまで）
2026年7月	アドバイザー（菅野、日沼）招聘。制作途中の会場を訪問。活動レビューを依頼。
2026年7月	鮫島、宝財踊り関係者との協議を実施
2026年8月	大川、三匹獅子舞関係者訪問（催事と合わせて実施）
2026年9月	杉山、釜焼きワークショップ実施
2026年9月	第2弾プレスリリース発出、PRチラシ配布開始、取材依頼の発出
2026年10月	会場什器制作と作品搬入期間
2026年10月	会場設営、のぼり旗など会場案内の設置
2026年11月	展覧会オープニング ※かつらお恵みの感謝祭（11月3日）と合わせてイベントを実施 ※同日、作家によるトークイベント実施
2026年12月	報告書冊子の完成
2026年12月	報告書冊子の完成PRイベントの実施（会場：都内の会場を選定予定）
2027年2月	事業終了。報告書提出

7. 2026年度のプロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状態的な目標）、定量（数値的目標）をお書きください。

以下の評価観点で計測します。

■定量評価

来場者数 ・カウンターでのカウント、オンライン含む場合はアクセス解析も併用、来場者目標：3000人

協力者数 ・運営協力者、ボランティア、地域団体、企業協賛数などを集計

レポートの意向 ・会場／Webアンケートから算出。次回も参加したいと回答した人の割合を集計

■定性評価

会場アンケート ・参加動機・印象・満足度・再訪意向

プレス掲載内容 ・メディア掲載数、掲載内容のトーン（肯定的・中立・批判的） ・地方紙・Webメディア・SNS記事を収集・内容分析

レビュー・SNS反応 ・SNS投稿数・いいね／共有数・コメント内容

地域住民の評価 ・地元住民の印象・変化（「誇り」「交流」「にぎわい感」など）、住民インタビューによる質的評価を実施

■総合的な評価

地域への波及性 ・イベントを通じて新たな関係・活動が生まれたか

文化的価値の創出 ・アートや文化を媒介に、地域への理解や誇りが醸成されたか

持続性・再現性 ・イベント後に次の動きが生まれたか、次年度開催意向、他地域への波及、参加者の再訪率など インタビュー、レビューなどを集計し、これらの指標から総合的に評価を行います。

8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

日本では南海トラフ地震などの巨大地震の発生が予想されています。震災直後の混乱が強く印象に残りますが、人々の生活においては、その後の復興の期間のほうが、より長く困難な課題として立ちはだかります。本活動は、日本でも数少ない原子力災害からの復興地域において実施される、独自の社会実践型プロジェクトとして位置づけるとともに、今後の復興地域におけるアート活動のプロトタイプとしても展開していきます。

2026年度以降も、本プロジェクトで培う「自活する村＝Self-Sustaining Village」という概念をさらに深化させ、アートを媒介とした地域の自立的な文化生態系の構築を目指します。イベントや作品制作にとどまらず、地域の人材育成・教育・産業・観光など多領域と連携し、文化が地域経済の循環の一部として機能する仕組みを整えていきます。具体的には、①村民や移住者、アーティストが協働する「地域アトリエ（仮）」の設立、②地域素材（羊毛、木材、古ガラス、農産物など）を活かした産業の開発、③アート・教育・福祉・観光を横断する「文化プログラム」の体系化を進め、アートが地域社会の中で持続的に役割を果たすための基盤を整備していきます。

さらに、国内外のアーティスト・研究者・デザイナーとの交流を通じて、葛尾村発の「自活する文化モデル」を他地域へと発信し、災害後の地域再生における新たな文化政策の指針として社会に還元していくことを目指します。将来的には芸術祭の開催も視野に入れながら、一過性で終わらないアーティストと地域の協働活動を通じて、「Self-Sustaining Village（自活する村）」としての当地域で展開するアート活動の形を構築してまいります。

9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

はい

<活動の様子>



【かつらお企画室】「羊の毛を織ろう！作ろう！マイチャーム」開催：2025年6月



【Katsurao AIR】Youth Program
杉山仁彦、釜づくりの様子 開催：2025年9月



【かつらお企画室】「てがきのもじで
かけらをつくろう！～"エビ粘"で焼き上げ！～」開催：2025年10月

